

文化

Art & Culture

小川洋子さん(小説)岩田由美さん(俳句)大森静佳さん(短歌)座談会



小説、俳句、短歌の持ち味や創作への思いについて語り合う(左から)
小川さん、岩田さん、大森さん=7月26日、岡山県立図書館

「私」と「世界」向き合う文学

芥川賞を受賞し、今や世界的な人気を誇る小説家小川洋子さん、角川俳句賞を受けた俳人で、山陽俳壇選者岸本尚毅さんの妻でもある岩田由美さん、角川短歌賞に輝き、気鋭の歌人として注目される大森静佳さん。岡山市出身で朝日高卒という共通点を持つ3人の座談会が、岡山県立図書館(岡山市北区丸の内)であり、それぞれの分野の創作を通して、人の内面と外の世界に向き合う文学の魅力を語り合った。(大石哲也)

小川さんと岩田さんは同級生(1980年卒)で、「岩田さんは学力抜群の優等生で、学年中知らない人はいないという存在だった」と小川さんが振り返れば、「いつも図書館にいた

小川さんには独特のオーラがあり、ちょっとあこがれていた」と岩田さん。2008年卒の大森さんは、在学中に同高で行われた小川さんの講演を聴いて短歌の道を志したことを明かした。

「短歌と俳句の違いとは」という小川さんの問い掛けに対しては、「俳句は周りの『世界』を書き、短歌は『私』を書くといわれる」と大森さん。岩田さんも同意し「俳句は、言いたいこ

母校・朝日高150周年記念 定型と自由や創作視点語る

とがなくても『写生』で成立するが、読み手に預けるところが多い」と答えた。小川さんは「短歌や俳句にはその場で生まれた思いを即興的に書く『スピード感』があるが、小説は歩みが遅い。その分、書き方、読み方が自由だというのが魅力だ」と語った。

俳句と短歌の最大の特徴である「定型」は、時に表現の自由と相反する「縛り」と思われがちだが、岩田さんは「身に着けてしまえばこれほど自由なものはない」。大森さんも「定型があるからこそ、比喩やフレーズでジャンプすることができる。閉じ込めようとする力があると、そこからみ出ようとする力が生まれやすい」とした。

小説には定型はないが「小川さんの作品には『型』というべき『区切られた空間』がある」という大森さんの指摘に、小川さんは、小説を書くきっかけとなった「アンネの日記」の影響から「延々と『閉じ込められた人々』を書いてきた。アンネが隠れ家でものを書くことで自由を感じたように、制限されたものの中に無限がある、という矛盾が自然に成り立つのが文学ではないか」と話した。

創作姿勢、視点については「プロット(筋立て)や結末を考えるより、物陰に隠れて、登場人物の会話や動きを感じ取っている。物語が行こうとしている方向を邪魔しないよう心がけている」と小川さん。岩田さんは「俳句は基本的に非人称だが、自分の外に広がる世界からすくい取ったものを表現していれば、そこに『私』がにじみ出てくる」。大森さんは「定型のリズム感が、自分でもまだ気付いていないことを掘り出してくるという興奮を楽しんでいる」と語った。

座談会は、朝日高が創立150周年を記念した「文学の集い」として企画。在校生有志と卒業生、関係者ら約150人が聴講した。在校生から創作の秘けつを問われる場面もあり、3人は「若い時はとにかく自分を一番に考えがちだが、外の世界での出会いを大切にしていれば、書きたい題材は自然に見つかるはず」とエールを送った。